

6月16日（月）

おはようございます。

在校生には何度かお話をしましたが、ウズベキスタンに、ナヴォイ劇場という劇場があります。これは、戦争中ソビエトによって捕虜になっていた日本人が作った劇場だそうです。今も健在で、そこでバレエやオペラの公演が行われています。

今日の話は、現在の麻生副総理がかつて外務大臣をしていたとき、北朝鮮の拉致問題で非常に頑張った中山恭子さんに、国会で質問を受けたときの答弁の中で話されたことです。ウズベキスタンにイスラム・カリモフ大統領という人がいて、当時ウズベキスタンはソビエト連邦でしたが、そこに強制移送されて労働を強いられた日本人兵士たちがいた。その兵士たちが労働する様子を見たイスラム・カリモフ大統領のお母さんが毎日同じ事を彼に言ったというのです。「みてごらんなさい、あの日本人の兵隊さんを。ソ連の兵士がいるときもいないときもおんなじように一生懸命働いているでしょ。あなたもああいう人間にならなきゃだめよ」と。

これをいろいろ調べると、本来1945年から46年、47年まで3年間かけて作る工事だったそうですが、なんと二年で完成させたのだそうです。500人がそれに従事していました。非常に過酷だったにもかかわらず、日本人は非常に勤勉に働いた。500人のうち79人はその現場で亡くなっているくらいですから。食料の状態も不十分ですし、ひどく寒いですが、そのなかで非常にまじめで働いた。ソ連の兵士がいるときもいないときも一生懸命やったというのです。イスラム・カリモフ大統領のお母さんはそれを見て、「日本人の兵隊さんを見てみなさい。あの人たちみたいに、人がいてもいてなくても一生懸命でしょ。あなたもああいう人間にならなきゃだめよ」と言われて、自分はそのことを人生の座右の銘にしてきました。大統領になった今も忘れていないと言う。

また、大統領のお母さんだけではなくて、近所のウズベキスタンの人たちも、日本人兵士に対していい印象を持っており、子どもたちによく食料を持たしたというのです。食料を持たせて、「みんなで食べてください」と。それを受け取った兵士たちは、その子どもたちに自分たちで、木で上手に細工をしておもちゃを作ってあげたというのです。食料をもらうのは当然だというようにひねた態度で受け取るのではなくて、子どもに食料をもらったら、そのもらった子供に対してお礼をしなくていけないと考えたのです。かわいい木のおもちゃを自分らで作ってそれを渡したのですね。

話は変わって、1966年にウズベキスタンで大地震がありました。古い建物はほとんどというか全部倒壊しましたが、このナヴォイ劇場だけが

残って、むしろナヴォイ劇場が避難所になったらしいのです。びくともしなかったのです。それで1990年代になって、大統領は記念碑を作ろうと企画して、プレートにナヴォイ劇場の前に作りました。そのとき大統領は、「日本人捕虜」という言葉ぜったい使わないようにせよと言われた。われわれは彼らの行為に対して好感も尊敬の気持ちも持っているのだから、また感謝の気持ちを持っているのだから、捕虜という言葉を使ってはならないということをお酸っぱく言われたというのです。そのプレートには、1945年から46年にかけて極東から強制移動させた数百人の日本人がナヴォイ劇場の建設に従事し、その完成に貢献したということが書かれているそうです。日本語と英語とウズベキスタン語でそのプレートが貼ってあるそうです。

核心に触れるまで努力するということは清風学園の伝統です。しかしこれはもともと日本人の伝統だったのです。与えられた環境でベストを尽くすというのが、もともとわれわれがもってきた文化なのです。もちろんこのなかには日本人でない人もいるでしょうが、そうであってもこの国土でずっと培われてきたいい伝統ですから、みながこのすばらしい伝統を受け継いでいかないとはいけません。わたしたちの学校ではそれを清風魂として伝えてきていますが、諸君たちも、人が見てなくてもいい加減なことをしない。人が見ているときだけまじめにやるのは、日本人が持っていた伝統ではありません。与えられた環境で、つねにベストを尽くそうと、核心に触れるまで努力しようとするのです。

「みんな、必ず帰ってもう一度桜を見よう」を合い言葉に必死に頑張っていたというのです。まさに希望をもって幸福を見いだそうとしたのですね。非常に過酷な労働だった。500人で79人も死んだのですから。しかしそういう伝統がわれわれの中にはあるのです。その大切な伝統をわれわれは受け継いでいかないとはいけません。

これは21世紀に通用する伝統です。21世紀は変化の激しい時代です。イノベーションも新鮮さを保てる時間はわずか二年、よくもって二年だと言われるほど非常に変化が激しい時代です。だからこそ与えられた環境でベストを尽くすというこの伝統は、ほんとうに大切な伝統であり、われわれが学んでいくべき伝統です。まさに清風魂はそういうことを言っているのです。諸君たちもひとつ、与えられた環境でベストを尽くすと、核心に触れるまでもかく努力すると、最後まであきらめないで頑張る、こういう精神を持って頑張りたいと思います。ついつい手を抜きたくなったり、勝手に自分で限度を決めたりしたら、これではいかんなど自分に言い聞かせて、気持ちを奮い立たせて欲しいと思っています。今朝の話はこれで終わります。 (学校長)